

# 『Verdade tropical』から『熱帯の真実』へ



国安真奈  
〔熱帯の真実〕訳者

## 『熱帯の真実』の訳者として

ブラジリアン・ポピュラー・ミュージックを代表する存在、カエターノ・ヴェローゾの著作『Verdade tropical』の日本語版が、このほど株式会社アルテス・パブリッシングから『熱帯の真実』として刊行の運びとなった。私はその翻訳を手がけている。本稿ではこの書籍について、訳者の立場からざくばらんに語ってみたい。



▲『熱帯の真実』初版、改訂版、英語版

## 自叙伝ではない回顧録的小説

カエターノは1942年、バイーア州サント・アマーロ・ダ・プリフィカソン生まれ。67年から翌年末にかけてトロピカリスモ（またはトロピカーリア）と命名された音楽ムーヴメントを主導し、それ以降も文化・社会・政治などブラジルという国の根幹に関わるテーマについて常に発言し、音楽的創造、映画制作、評論の執筆などを通して議論を喚起してきた。

『熱帯の真実』は彼の代表的な著作であり、個人的な回顧録の形をとりつつ、ブラジルという国／国民／文化およびトロピカリスモという密接に相関するふたつの公的な論題について振り返り、分析する。時代としては著者の幼少期にあたる50年代から70年代半ばまでの時期

を中心とし、サブテーマとして、音楽のみならず映画、文学、演劇、人、社会、政治、哲学など様々な分野をまたぐ。

とはいえ、本書は学術書ではない。かといって、すらすらと読み進むことのできる自分語りでもない。初版のカバー返しには、カエターノ自身の言葉として、自叙伝ですらないと書かれている。著者によれば、「大衆音楽の本を求める人にはややこしすぎ、ややこしい本を読みたいと思う人には大衆音楽に近すぎるかもしれない」。あるいは、「エッセーが散りばめられた小説として読まれるべきだ」ともいう。

## 『熱帯の真実』の特徴

単純なジャンル分けでは捉えられない本書を開いて、最初に興味を惹かれる特徴をあげるとしたら、一つは多くのセンテンスが長く複雑であること、もう一つはまるで直感像記憶のように細密な著者自身の心理描写だろう。

まず、多くのセンテンスが長大かつ複雑であることについて、著者は「僕は長いセンテンスが好きで、実際それ以外の方法では、会話の中でさえ自分を表現することができないのだと思う」と書いている。事実、多くの文は、ある一つの仮定から発して、ある一つの結論に至るような、単純な構造を持っていない。統語論的分析をすれば、緻密さと正確さの度合いに吃驚させられるだろう文が続く。そうした文を積み重ねたパラグラフも、しばしば極めて複雑な意味を持つ。そして、パラグラフとパラグラフの繋がりも、また然りだ。読む者は、あたかもカエターノという人の思考の道筋の拡大や収縮、分岐や統一、屈曲や迂回、寄り道といった様々な局面があまざり記録されているかのような印象を受ける。

## カエターノ来日時の通訳体験から

実は、この特徴的なスタイルが著者本人の発話に現れるのを、来日時の日本語媒体通訳として、一度だけ聞いたことがある。あれは2度目の来日時だったように思う。残念ながら、インタビュアーが誰で、どの雑誌に掲載されたかは今ではもう記憶にないが、何本もの媒体が連続して取材を行うインタビュー・マラソンの中で、ある質問に対してだけ、カエターノは他と全く異なる返答の仕方をした。その発話の構造の複雑さ（通訳メモが、突如として大変ややこしいものになった）が、本書に特徴的な文体とそっくりだった。

他の質問に対しては人が普通に会話するのと変わらない答えを返していたので、ガラッと口調が変わったことが印象に残っている。なぜ、あの時だけ、明らかに違う話し方をしたのだろう。インタビュー・マラソンでは、形式上どうしても、インタビュアーは同じような質問ばかり繰り返し受けることになりがちだ。「同じ質問が多い。なぜ記者会見にしないのか？」と、ずばり訊くインタビュアーもいる。「（もう答えは知っているのだから）君（通訳）が代わりに答えてくれ」



カエターノ・ヴェローゾ著『熱帯の真実』日本語完訳版表紙



◀ 4度目の来日時（2016年10月）

と言う人は、幸い少数派だ。繰り返しの図式を受け入れた上で、話し手自身も飽きないように、別アングルから回答するなどして工夫する人が多い。カエターノの場合も、たまたまその質問に対して、突っ込んで自己表現してみようと思ったのかもしれない。問いを構成していた要素のいずれかに、そのような反応を誘うものがあつたのかもしれない。だが質問は、その時点までの質問の流れや傾向から特に飛躍するものではなく、また哲学的であったり政治的であったりといった特殊なものでもなかった。その証拠に、訳し終えて目線を上げたら、インタビュアーが目を丸くしていたことが記憶にある。同様の驚きが、この本では存分に味わえる。

## 細密な心理描写

もう一つの特徴、極めて細密な著者自身の心理描写も、全編を通して強い印象を読者に残す。とりわけ第2部「チヴィーニョ・マラヴィリョーゾ」の章の幻覚剤についての記述や、第3部「ナルシスの休暇」の章で、それは顕著だ。

特に後者は、1968年12月27日から翌年の2月19日まで及んだ軍事独裁政権による逮捕拘禁（彼は、後に文化大臣となる盟友ジルベルト・ジルとともに身柄を拘束された）について仔細に証言する章だ。理由も詳らかにされぬまま投獄され、釈放どころか取り調べを受ける機会についてすら何の見通しも持たずに灼熱の監房に閉じ込められている著者の心理が、形の異なるブロックをひとつひとつ積み上げるような緻密な描写で記されている。執筆時点ですでに30年が経過している出来事について、自身の心の動きと思考の流れをこの精度で再現

像できる。

国家による暴力、法の庇護を受けられないという状態の本当の恐ろしさを、私たちの多くは幸いにして直接は知らない。しかし、例えば思想信条の侵害についてはどうだろうか。この章が喚起する疑問は決して少なくなく、しかも重い。それらの疑問は、時間や場所の違いを超え、未解決のまま世界中に存在し続けている。そうしたことに思いを巡らせる時、当時を知らない若い読者に、著者がこの章を先に読むよう勧めることに合点がいく。「ナルシスの休暇」は、この章だけでも一級の歴史証言であり、広く読まれ、引き継がれていくべきものなのだ。

そして、このような剥き出しの心理を文字に表すにあたって、著者が一体どれだけの精神的エネルギーを必要としたかについても、読み手は想像せずにはいられない。その思いは、初版刊行20年を記念する新版の序を読んで、さらに強まった。そこでカエターノは、『粋な男』の国内ツアーの最中に鬱の発作に見舞われたことを記している。考えられるその原因のひとつが、感情的性質の強い出来事を語ったことだったかもしれないと書く。

## ポルトガル語初版は1997年

ポルトガル語の初版は、サンパウロの Editora Schwarcz 社 (Companhia das Letras) から1997年に出版されている。訳者が原書を手にしたのは初版発行から間もない頃で、それから邦訳版刊行までに20年以上の歳月が経過した。とはいえ、この時間は翻訳作業のみに費やされたわけではない。翻訳権の取得、取得後の移転、訳者と編集担当者それぞれの公私の事情など、あれやこれや

があり、翻訳作業はそれらの合間を縫うようにして進んだ。

原書が文字ばかりの全524ページという本なので、どうしても他の仕事をやりながら訳していくことになる。少しでもまとまった時間があれば、翻訳を進め、訳文を読み直して修正した。また、この20年の間には訳者の頼りない雑多な知識も多少は増えたり整理されたりして、訳注の多くに反映できるようになった。結果的には、本書の翻訳にはそれだけの時間が必要だったのだろうと思う。

## カエターノの長男モレーノは物理学者

昨年6月、私用で訪れたリスボンのダウン・タウンで、訳者は偶然、カエターノの長男モレーノと再会した。実はカエターノはモレーノ、ゼッカ、トンの3人の息子たちとともに7月に『オフェルトーリオ』の欧州ツアーを予定しており、モレーノはそれに先駆けて、家族や友人たちとサント・アントニオ祭を楽しもうと、リスボンに滞在していたのだ。

何度も来日しているモレーノは、ミュージシャン、アーティストであると同時に現役の物理学者でもある知的な人だ。そして日本語の学習者でもある。その彼は開口一番「父の本を訳してるんだって？」と笑顔で訊いてきた。カエターノ本人から聞いたのだろうか。その時は、翻訳は上がっているが、編集作業に着手できていないのだと答えた。

あれから1年余。ようやく「ほら、できたよ」と言える。モレーノ、そしてもちろんカエターノ本人が、訳に頷いてくれるとよいのだが。



▲シチリアでも見た（下）公演予告ポスター